
戦場のヴァルキュリア 東方の強者達

海の永帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場のヴァルキュリア 東方の強者達

【Zコード】

Z0057Y

【作者名】

海の永帝

【あらすじ】

西暦1935年、ヨーロッパ大陸は第一次ヨーロッパ大戦であった。

東の国は和国は帝国との不平等の条約に従い、ガリアに軍を派兵した。

その部隊は陸海混成部隊111部隊である。

第一話（前書き）

久しぶりの投稿です。

第一話

西暦1934年

場所は和国帝都東京陸軍大学校 校長室

校長室で一人の男が書類を作成していた。

その男の外見は、身長が180以上で顔は白頭巾で覆っている。

その男の名はリュウ・アキツキ少将、出身は播磨の国、年は三十八歳。

リュウS.i.d.e.s

「やつと、書類終わった」

俺は独り言を漏らした。

大体、書類が半端なく多いぞ、約一時間かかったぞ。

後はやることがないのでタバコを吸つていると部屋の扉からノックをする音が聞こえた。

「入れ

「失礼します。」

扉が開いた。

入つて来たのはまだ幼い顔を残している伝令兵だった。

「アキツキ少将閣下、司令部から、電報です。」

「読め」

「ハツ！！【アキツキ少将へ、この電報が届き次第、直ちに司令部に出頭せよ。】以上であります。」

「分かった。すぐにに行く、車を出しどけ。」

「了解しました！！」

伝令兵はそのまま、部屋から出でていった。

俺は、棚の上に飾っていた。和刀を取り腰に付け部屋を出た。

第一話（後書き）

オリキヤラ募集中です。

オリキヤラ採用方法

兵【突撃兵や偵察兵】

元の職業は例えば忍びや武士や農民や商人、日本らしい職業で、
どこの国出身

例えば甲斐の国や陸前の国、昔の日本の国名で、

名前

日本人らしい名前で、ダルクス人でも可

性格と誕生日もお願いします。

第一話（前書き）

またまた書いて見ました。

オリジナルキャラクターを募集中です。

第一話

和国帝都東京軍指令部

大将室

「リュウ・アキツキ少将出頭しました。」

「入りました。」

「失礼します。」

部屋に入るとそこには、白いあごひげを携え、眼光は歳をとつているが、多くの修羅場をぐぐり抜けた。戦士の目をしていた。彼の名はナオキ・ヤマウチ大将、年齢は63歳 肥後の国出身地。

「忙しいなか、呼び出してくれてすまんな、リュウ少将」
俺は椅子に座つた。

「別に忙しい訳でありません。まさか暇だから談話するために呼び出した訳じゃないですよね。」

「ハツハツハツ！ そんな訳ないだろ？。」

ナオキ大将が笑っていた。……別に冗談を言った訳ではないが。大体この人、笑うところがわからないだよな。

「さて、冗談を言うのはここまでにして、これを見てほしい。」

ナオキ大将は笑いを止め、ナオキ大将の隣にあるバックの中から、ある一枚の書類を出した。

「「これは？」

「帝【ミカド】からの指令書だ。見てくれ
元帥から、書類を渡せれ俺は読んだ。

「「リュウ・アキツキ少将殿、貴官を同盟国である。東ヨーロッパ
帝国連合の条約に基づき、西暦1935年1月23日に部隊を率い
東ヨーロッパ帝国連合に派兵せよ。」」

「……ナオキ大将」

「君が言いたい事が、よくわかる。しかし決まつたものはしょうが
ないのだ。」

なにかの刑ですか、これは、島流し？

「俺、以外の適任者はいないのですか？」

「いよいよ、あの時戦闘に加わった士官だった者達は君以外を残し皆
除隊した。リュウ少将、君はヨーロッパで帝国と戦つた一人だ。もし
他の奴を頼むと、部隊を全滅しかねない。頼む！…このとおりだ
！…」

と頭を下げる。ナオキ大将だった。

「頭をあげて下さい。わかりました。引き受けましょ。」

「本当かね。……ありがとう！－！」

ナオキ大将は俺に握手をしてきた。

「ただし、条件があります。」

「条件？なにかね？」

「一つは部隊は自分に作らせて下さい。二つ、海軍の兵士にも入れさせて下さい。以上です。」

「一つめの部隊を作つてもいいが、二つめは海軍の大将に聞かないとわからないが、いいだろう。わしがなんとかする。」

「ありがとうございます。」

「後、もう一つ特命があるのだが……」

その後、ナオキ大将から特命を聞き俺は司令部を出た。辺りが真っ暗ら闇だが。星空が見える

明日から忙しくなるな。

第一話（後書き）

特命とはなにか、それはなんなのか、物語を通して語れます。

これからもよろしくお願ひします。

第参話（前書き）

仕事が忙しくて、話が短いです。

まだまだオリジナルキャラクターを募集中です。

和国陸軍大学校 校長室

「リュウ Sides」

ナオキ大将から、指令書と特命を言われた翌日 僕は早速、部隊の隊員集めをした。

海軍からの隊員集めの許可を得てないので、最初は陸軍から探す事にした。書類【全和国陸軍士官の経歴の書類】を目を通し何名かの曲者揃いの士官がいた。その中にとある一人の士官をここに呼び出す事にした。

俺は伝令兵を呼んだ。

「御呼びですか、リュウ少将閣下」

「すまんが、電報を頼む内容は【東京方面軍第11機甲師団第9小隊々長ハジメ・タケダ少佐を陸軍大学校に出頭せよ】だ、以上だ。」

「了解しました。」

とそのまま、伝令兵は、電報室に向かった。

それから20分後

「いい香りだ」

俺はコーヒーを飲んでいた。和国では緑茶が定番だが、俺はコーヒーに長く滞在していたので、コーヒー好きになっていた。

「コーヒーを飲んでいると、校長室の扉からノック音が聞こえた。

「誰だ？」

「ハジメ・タケダ少佐、出頭しました。」

「来たか、入つて来てくれ。」

「失礼します。」

扉を開けて来た。凛々しい体つきで、女性方からも人気がありそう
顔立ちだな

ハジメ・タケダ少佐

甲斐の国出身地 年齢25歳

「よく来てくれた。座ってくれ」

「失礼します。」

「コーヒーだが、飲むか？」

「いただきます。」

俺は、ハジメ少佐にもう一個のコップにコーヒーを入れた。
コップを渡しハジメ少佐はコーヒーを飲んだ。
「…………どうだ？味は？」

「……少し苦いですが、いけます。」

「そうか、ならいい」

「リュウ将軍、なぜ私をここに呼んだのですか？」

「実は君の軍の経歴に興味を持ったからだ。君は元は騎兵科で首席を取り、留学生に選ばれ帝国に留学したが、帰国後突然機甲科に入り、現在に至る訳か……帝国で君は何を見たんだ？」

俺はそう問うと、ハジメ少佐をおもむろに答えた。

「……自分は、当時留学先の帝国はある【小国】との戦いがありました。私はその時國から觀戦武官に選ばれました。兵力は絶対的に帝国が有利でしかもその【小国】はヨーロッパでは珍しい戦車後進国で、いまだに騎兵を使っていました。私はその時に私はある戦闘を見ました。帝国軍の戦車部隊が20台【小国】の騎兵隊がおよそ300人の戦闘でした。

結果は帝国軍の戦車部隊の圧勝でした。それから一週間後、その小国は帝国に無条件降伏をしました。私はこの時に思いました。騎兵の時代は終ったんだと、これからは戦車が陸の霸者だと実感しました。」

た。

「……なるほどそうだったのか、」

彼の帝国での経験談を聞いて俺は思った。

彼を部隊に入れよう

彼なら、俺と同じくヨーロッパでの戦闘を知っている

「ハジメ少佐、単刀直入に言つ。俺に君の命を預けてくれないのか？」

「はあ？」

いきなり何の事か、さっぱり分からず困惑している。

「いや実は……」

俺は昨日ナオキ大将から言われた事を洗いざらりと言つた。

「そうだったのですか。」

「もし、君が入ってくれたら君を戦車部隊の指揮官に任命するが、どうだ？」

ハジメ少佐はしばらく考えた後

「わかりました。この命【閻魔大王】と言われているリュウ・アキツキ将軍に自分の命を預けます！」

答えたハジメ少佐の目は覚悟を決めた目をしていた

「すまん」

俺は感謝の言葉を言った。

「しかし、問題があります。」

「なんだ？言つてみる」

「はい、和国に戦車はヨーロッパでは戦車戦をしても、手も足も出

来ないと思います。」

確かに和国戦車、通称【9年式戦車】は47mm砲戦車砲と7.7mm車載機関銃を武装しているが第一次ヨーロッパ大戦の戦いで、帝国軍の機甲部隊と戦つたが役に立たなかつた。

後任の戦車【通称21年式戦車、和国陸軍現主力戦車】は9年式戦車を上回る57mm戦車砲と12.7mm車載機関銃を武装をしているが、これでもヨーロッパでの戦車戦では負けるのが目に見える。

しかし

「心配するな。今年中に新型戦車が開発する。」

「新型戦車ですか？」

「そうだ、ヨーロッパのどこの国々の戦車でも、互角に戦えるようにした。確かに完成は今月中だったかな。ハジメ少佐楽しみに待つてくれ。」

「分かりました!!」

その後、約20分間ぐらいた話をした。

ちなみにハジメ少佐は俺と同じく独身らしい。

理由は

「自分はモテ過ぎて困るから独身」だそつだ。

第参話（後書き）

ちなみにハジメ・タケダ少佐は Watershedさんが考えてくれました。本当にありがとうございました。

もしも、和国の21式戦車をヨーロッパで、戦車戦をしたらどうなりますかね。自分は恐らく対戦車兵器の砲弾を一発喰らつたら、大破すると思います。

ハジメ少佐が言つた戦車と騎兵の闘いは現実の世界でも本当にありました

それは第二次世界大戦のナチツドイツとポーランドとの闘いであつたそうです。

オリジナルキャラクター募集中です。

これからも応援よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0057y/>

戦場のヴァルキュリア 東方の強者達

2011年11月17日19時42分発行